「キリストを食べる」
ヨハネによる福音書 6章34節～59節

バプテスマや他教会からの転入の希望があった場合、教会では通常、準備のクラスを設けて 必要な学びの時を持ちますが、私はそのとき、準備の方々に必ず尋ねるようにしていることがありました。こんな質問です。「具体的なプログラムとして、教会で一番大切なものは何だと思われますか」。他のプログラムはどうであれ、これをなくしたら、教会が教会でなくなってしまう。教会が守るべき最後の砦(とりで)。教会が教会として そのいのちを与えられる、そんな根底的なプログラムです。それは言うまでもなく、礼拝ではないでしょうか。本質的な意味合いにおいて、教会のすべては礼拝に始まり礼拝に終わる、と言っても過言でないのではないでしょうか。ただし、私の質問はそれで終わりでなく、続きがもう一つあります。「では、その礼拝の中で一番大切な部分は何だと思われますか」。いかがでしょうか。難易度が少しばかり高くなったでしょうか。以前、バプテスマの準備をしていた二十歳(はたち)の女子大生がこんな答えをして、私をしばし、キョトンとさせました。「『サビ』のところですか」。お分かりになるでしょうか。サビ、つまり、礼拝の最後に「願わくは、イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが 私たち一同と共に、豊かに限りなくありますように」と祈る あの祝福の祈り、祝禱(しゅくとう)の終わりの部分です。大学のオーケストラでバイオリンを弾(ひ)いていたこともあって、一番の聴かせどころを 彼女はそう呼んだのですが、私は初め、何のことを言っているのか分かりませんでした。彼女の中では、最後にぐっと盛り上がるとともに、なんとなく ありがたみのようなものも感じていたのかもしれません。いずれにせよ、プロテスタント教会では通常、礼拝の中心は「説教」にある、と言われたりします。その日のメッセージを伝えるからです。私もまた、基本的には、その言わんとするところを理解しているつもりです。ただ、より厳密に言うと はたしてどうなのだろう、とも思っています。礼拝の中心は 本当は、聖書の言葉を読む「聖書朗読」の部分にこそあるのではないか、と思うからです。なぜなら、他の部分は様々な意味で、いわゆる主観的な また恣意的(しいてき)な色合いが滲(にじ)むことが少なくないように思われるためです。実際、聖書的に考えて なんかしっくりこない、と感じられるときもなきにしもあらずではないでしょうか。もちろん、主観的なものが一概に悪いということではありません。そうしたものも含め、それぞれの広がりを分かち合うことで、私たちはより豊かでより深い信仰の理解へと導かれます。そうではなく、例えば讃美も祈りもその他のものも、そのどれもがそもそもは 聖書の言葉に基づき、その御言葉(みことば)に押し出されて、そこから出てくるものではないか、ということです。そして、説教もまた、人がその務めを果たすいじょう、どれほど注意をして 自分を抑えても、そこにはやはり、説教者の思い込みや好みが出ないともかぎりません。ですので、礼拝の中心はやはり、聖書の言葉そのものでなければならないように思わされます。そして、教会の土台もまた 同じように、聖書の御言葉

でなければならないと。極論すれば、聖書を朗読するだけで、それだけでメッセージが生きて的確に伝わり、聴く者の心が突き動かされるなら、説教はなくてもかまわない。そのようにすら思います。そうした意味では、礼拝における聖書の朗読をもっと大切に、もっと丁寧にすべきなのかもしれません。とはいえ、異国の地に根を持ち、しかも数千年の歴史を背景に持つ聖書ですから、現実には そう簡単に済む話ではありません。私たちがそこから いのちの語りかけを聴き取るには、やはり、説教の果たすべき役割は大と言えるでしょう。

一方、ミサに出席されたことのある方は御存じかと思いますが、カトリック教会ではやや趣(おもむき)が異なります。カトリック教会では礼拝をミサと呼びますが、講壇の配置からしてもプログラムの内容からしても、その中心はあくまでも「聖体拝領(せいたいはいりょう)」と呼ばれる式が中心になっています。文字どおり、聖なる体を拝して受領すると書きます。イエス・キリストの体と血とを表わす「パンと葡萄酒(ぶどうしゅ)」を頂く式で、私たちが「主の晩餐式(ばんさんしき)」と呼んでいるそれに相当します。聖なる晩餐の台と書く聖餐台(せいさんだい)が講壇の中央に設(しつら)えられ、そこにパンと葡萄酒が置かれます。近年は説教にもそれなりに重きが置かれるようになりましたが、プロテスタント教会のように長くはありません。中心はあくまでも聖体拝領です。聖体拝領がなぜ ミサの中心かというと、司式者の祈りによって、パンと葡萄酒が実際に主イエスの体と血に変わるとされているからです。パンと葡萄酒が現実にイエス・キリストの肉と血に変わり、それらを頂く私たちの中に実際に入ってくるとなれば、たしかに これ以上の奇跡はないでしょうし、それこそ 私たちを内から変えてくれるにちがいありません。カトリック教会はそのようにして 神の恵みを頂き、その感謝を表わそうとしていますが、これに対し、プロテスタント教会は一般に、パンと葡萄酒が実際に主イエスの体と血に変わるとは考えず、それらを象徴として捉えて式を守っています。私個人としては、教会の伝統という背景もさることながら、礼典として確立されたそれとしては、聖体拝領もまた、それをするようにとの聖書の言葉を基(もとい)としているいじょう やはり、聖書がすべての土台に、すべての中心にあると考えています。とはいうものの、聖書が語るイエス・キリストにある信仰はどこまでいっても、私たちを愛するがゆえに十字架の上で裂いて流してくださったその肉と血とを感謝するところにあるわけで、その意味では、イエス・キリストの体と血とを表わすパンと葡萄酒をミサの中心に据えるカトリック教会のあり方は 私たちにも大切な事柄を教えてくれていると言えるのではないでしょうか。

バプテストの教会では、毎月 月の初めの礼拝で主の晩餐式(ばんさんしき)をまもる所が一般的なようです。それはそもそも、「コリントの信徒への手紙 一」の 11 章に記されている、使徒パウロの次のような言葉から来ています。「わたしがあなたがたに伝えたことは、わたし自身、主から受けたものです。すなわち、主イエスは、引き渡される夜(よる)、パンを取り、感謝の祈りをささげてそれを裂き、『これは、あなたがたのためのわたしの体である。わたしの記念としてこのように行いなさい』と言われました。また、食事の後(あと)で、杯(さかずき)も同じようにして、『この杯は、わたしの血によって立てられる新しい契約である。飲む度(たび)に、わたしの記念としてこのように行いなさい』と言われました。だから、あなたがたは、このパンを食べ

この杯を飲むごとに、主が来られるときまで、主の死を告げ知らせるのです」（Ⅰコリント 11：23～26）。私たちはこうして、主の晩餐式を守り、主の肉と血の象徴であるパンと葡萄酒とにあずかっていますが、今月の聖書箇所は一読して感じられるとおり、それと無縁でない内容になっています。ヨハネの福音書がまとめられた紀元 90 年代、主の晩餐式（聖餐式）がいわゆる愛餐的な食事から分かたれ、その形式をどの程度 整え、礼典的な性格をどれくらい備えるに至ったか。それはいま一つ 定かでないものの、しかし、その過程が進んでいたことは疑いなく、今月の箇所はそうした情況を反映していると考えて問題ないと思われます。そのような背景のもと、ヨハネはいったい、何を伝えようとしているのか。主の晩餐式との関わりも含め、主イエスの肉と血を頂くということについて、その意味合いをより基本的に、そして どこよりも明確に語っていると言えるのではないでしょうか。とりわけ 53 節から 58 節において、そのことに繰り返し触れられる主イエスの言葉を書き留めています。

いみじくも、時は、主の十字架の受難週（4 月 2～8 日）です。この意味からも、心に深く留め置きたい事柄ではないでしょうか。

6 章も、御一緒に読み進めて 今月で 59 節にまで至りますが、22 節以降 、主イエスは一貫して、御自身が「まことのパン」であると語ってこられました。「天からのまことのパン」(32) であり、「神のパン」(33) であり、「命のパン」(35) であると。そして今回、そのクライマックスとして、こう言われます。53 節、「はっきり言っておく。人の子の肉を食べ、その血を飲まなければ、あなたたちの内に命はない」。51 節までは「パン」と言い、また「肉」と言って、そのパンを食べなさい、その肉を食べなさい、と招いてこられました。主イエスは ここに至り、自らの十字架を暗示しつつ、「私の肉を食べ、血を飲まなければ・・・」と、より具体的に、より掘り下げて、真のいのちの源を告げられたのでした。しかし、人々はどう言って、これに言葉を返したでしょうか。聖書は、先立つひと言として まず、「ユダヤ人たちは、『どうしてこの人は自分の肉を我々に食べさせることができるのか』と、互いに激しく議論し始めた」（52）と記しています。そして、今回に続く 直後の 60 節です。そこでいったい、何と言われているか。「弟子たち」までもが「実にひどい話だ。だれが、こんな話を聞いていられようか」と呟いたといいます。ここでの「弟子たち」とは 12 弟子のその弟子たちではなく、いわば追っかけのような者たちをも含んだ より広い意味での弟子たちを指していますが、がしかし、彼らまでもが、なんともひどい話だ、と そう言ったというのです。御存じのとおり、ユダヤ教の信徒は今日でも、血の付いた肉は食べません。血を抜いたものしか、口にしません。傷を負ったりして 血が出ると、生命力が衰える。ですから、ユダヤ教では、血は命を表わし、神に属するものとされています。そんな彼らにとって、血を飲むなどとは、信じがたい、身の毛の弥立つようなことでした。このように、そこに込められた「内なる真理」を見抜く目を持たないと、イエス・キリストの御言葉はたしかに、容易に理解できない場合も少なくないように思われます。聖書の人々と同じように、いったい何を言ってるんだ、と 主イエスに背を向けてしまうのではないでしょうか。

アメリカの教会では、受難週に「洗足の式」と呼ばれる式を行なう所が少なくありません。十字架を前にして、主イエスが弟子たちの足もとに跪かれ、その足を洗われたという記事に基づくものです。ヨハネの福音書では 13 章に出てきますが、これに倣って、教会員がお互いの足を洗い合います。その意味するところは、すなわち そこに込められた内なる真理は、すでにお気づきのとおり、自分を低くして 互いに仕え合うことの大切さです。ところが、式を見て家に帰った小さな女の子がお父さんとお母さんにこう言ったというのです。「ねぇ、教会の人たち、教会に来る前にどうして 足を綺麗にしてこないの」。子どもらしい 思わず微笑むような観察ですが、ピントがなんとも少々ずれていて、大人の私たちが同じようなことを言ったとしたら やはり、情けなさを禁じえないのではないでしょうか。けれども、物事の背後に隠されている見えない真理を考えたり見たりすることの難しさ。それを見抜くことの難しさ。それは、大人になった私たちにも依然として付きまとっているのではないか。そんなふうに思わされます。主イエスの言葉で激しく議論し、また呟いた人たちは、言葉の裏に込められた「内なる真理」に思いがいかず、「見えない真理」に心の目が向きませんでした。それもこれも、真実 大切なものを、見えるあれこれを超えて、またそれらの奥へと探し求めること。心の目で、また魂の目でそうすることから始まるように思われます。

主イエスは言われます。私の肉を食べ、血を飲まなければ・・・。それはいったい、どういうことでしょうか。言葉を表面的に聞くのではなく、その奥に入り込んで、そこで内なるメッセージに聴き耳を立てるとき、そこから何が聴こえてくるでしょうか。それは 一つには、聖書を単なる書物として、単なるお話として読み、そこに記されている神についてあれこれ論じるだけのところから出るがよい、という声ではないでしょうか。なぜなら、そうしないでは、「どうしてこの人は・・・」と議論をし、「実にひどい話だ」と呟いた今回の人々と同じところに留まり続けることになるからです。そうではなく、「私自身を内に入れてほしい。心を広げて、単なる言葉の説明でない この私自身を。いのちが内に息づくよう、そうしてほしいのだ」と、イエス・キリストはそのように言っておられるのではないでしょうか。実際、54、56、57 節では、動物が餌を食べるときのように「ガツガツ食べる」「ムシャムシャ食べる」という意味合いの言葉が用いられています。「（わたしの肉を／わたしを）食べ（る）（τρώγων<τρώγω）」という部分です。つまり、元々のギリシア語では、「貪り食うように、主イエスを そのようにガツガツ、ムシャムシャ食べなさい」と招いているのです。生々しすぎるくらいにリアルな言い回しではないでしょうか。ヨハネの教会はきっと、そのようにして イエス・キリストに生き生きと見え、そこで生き生きと生かされていたのでしょう。主イエスは十字架の上でこの私たちのために肉を裂き、血を流して苦しみ悶え、その命を注ぎ出してくださいました。私たちはこのとき、その光景を、目の前に十字架が立っているかのようにして想い起こします。十字架上の主イエスの御姿を、そのようにして想い浮かべる。そして、イエス・キリストの悶えと苦しみを自身のものとして、私たち自らがその足りなさと至らなさに悶え苦しみます。そのうえで、そこに注がれている十字架の愛を味わい知るのです。主イエスの肉を食べ、その血を飲むとは、そのようにしてイエス・キリストを食し、その恵みを

頂くことではないでしょうか。私たちはそこで 主イエスのいのちにあずかり、それに生かされて、そこから押し出されていきます。パンを食べ、葡萄酒(ぶどうしゅ)を飲むことで肉体が養われるように、主イエスを内に頂くことで、私たちはそのいのちを豊かに養われていくにちがいありません。

それはまた、見方を変えれば、私たちが神の御手(みて)に飛び込むこと、とも言えるのではないでしょうか。そこに身を投げ出すことです。愛と呼ぶにふさわしいもの。それは心からの誠意に基づいたものであり、互いを互いに豊かにし合い、それぞれをそれぞれらしく生かし合うものであるにちがいありません。そうした誠意が感じられたなら、私たちはきっと、そこに飛び込めるのではないでしょうか。そこに身を投げ出すことができるだろうと思います。主イエスを食べるとは、裏切ることをされないそのようなイエス・キリストの御手に飛び込み、その思いをたずねつつ、そこで生きることと言えるのではないでしょうか。そのとき、主イエス御自身が私たちの内に生き、平安と力を与えると言ってくださいます。「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、いつもわたしの内におり、わたしもまた いつもその人の内にいる」(56) と約束してくださり、「わたしが父によって生きるように、わたしを食べる者もわたしによって生きる」(57) と 重ねておっしゃってくださって。しかも、私たちはそこで、新たな自分をも見せていただけるように思われます。そもそも、パレスチナでは パンは命を養うものの象徴であり、そのパンを分かつことは信頼と献身とを表わしました。敵とパンを分かち合えば 和解を意味し、身寄りのない者を招いて家でパンを分かてば、それは どんなことをしてでもその人を守ることを意味しました。ですので、命のパンであるこの私の肉を食べ、その血を飲みなさい、と主イエスが言われたとき、それはまさに、私たちに対して御自身の信頼と献身とを約束し、また 同じそれらをこの私たちにも期待されたということにほかなりません。私たちが主イエスを頂くとき、主イエスはそうする私たちに信頼を置いてくださり、御自身を捧(ささ)げてくださる。私たちもまた、そうしてくださる主イエスに信頼をし、その御心(みこころ)を求める。そうであれば、私たちに必要とされているのは、心を開(あ)け広(ひろ)げて祈ること。祈りを真っすぐにし、そして、主イエスの御声(みこえ)を同じように真っすぐ受け止めることではないでしょうか。

ただし、ここで一つ、注意をしておかねばならないことがあるように思われます。それは、言うまでもないことでしょうが、キリストを食べたからといって、それであたかも魔法がかかったかのように 不思議のマジックが起こるということではない。事と様子がパッと変わって、突然、スーパーな人間になるということではない、ということです。イエス・キリストが内に生きるとはそういうことではなく、主イエスがいつも伴い立って、絶えず育み続けてくださることだからです。信仰とは本来そういうものであり、しかも、そこでは私たちの個性も殺されることなく、むしろ生かされていく。生かされて、一人ひとりがそれぞれにそれぞれらしく、様々な仕方で様々な在り方へと導かれてゆくように思います。

そんな実際と言ったらよいでしょうか。ちょっとユニークで面白い方がおられますので、御紹介してみましょう。すでに天に召されましたが、東京の狛江市(こまえし)にある和泉多摩川教会(いずみたまがわきょうかい)という教会（日本基督教団(キリスト)）で長年 牧会(ぼっかい)をされた牧師です。阿部光子(あべみつこ)という方ですが、作家としても知られたため、

その方面で御存じの方々もおられるかもしれません。そもそも 牧師が女性でしかも作家というのは当時としてはそうそうあることでありませんでしたが、それにしても、その半生のなんともユニークなことか。こんな半生です。

それは生い立ちからして面白いもので、生まれたのは 1912 年のクリスマスの朝。「クリスマス生まれの光ちゃんだから 良い子におなりと言われ、それがプレッシャーになりまして、幼いころ、口数の全く少ない子でした」と述懐されています。それが牧師になって、よく喋る。当時の幼稚園の園長がこう言って、説教の材料にまでされたといいます。「皆さん。この人を見てください。子どものとき 口をきかなくて先生方を悩ました人が、今では、雪解け現象のようによく喋ります。皆さん、神にある可能性を信じましょう」と。もちろん 冗談交じりの言葉ですが、御本人曰く、取り立てて才能もなく、娘時代は娘時代で 低血圧で顔色が悪く、生気がなかったそうです。そのため、魅力がなく、10 人を超える相手から結婚の話を断られ、30 になっても売れ残りのオールドミスと言われていたとか。ただ、本を読むのが好きで、物書きになったらどうかと思って、小説を書き始めます。そして、思いもかけず 芥川賞の候補になるのですが、ここでも 結局は落選してしまいます。「もう少し」というところで。「残念無念、神も仏もあるものか」と、その心をよぎります。しかし、阿部先生はこう言われる。「もし、売れ残りの何のと言われているときに、芥川賞をとってごらんなさい。この低い鼻がずっと伸びて、辺りを見下し、今ごろ どんな嫌な女になっていましたことか。思ってもぞっとします。しかも、引っかけておいて落とす。これはもう、神業です」。その後も、事は続きます。幸いにも、お嫁の来手のないクリスチャンの男性がいて、その男性と結婚するのですが、こんなふうに記しておられます。「その男の頭から、後光が射しました。ところが、あらステキと嫁に行ったら、この男、聖書の言葉を私の都合の悪いところでも使うのです。私は重い口を開いてあれこれ言うのですが、向こうは舌をやたらに騒がせず、黙りこんでしまいます。やむなく 問答一人持ちの夫婦喧嘩をしましたが、三十分もやれば 口はくたくた。向こうは涼しい顔です。しかし、この世に悪いことばかりというものはなくて、口がこれだけ回るようになったのは この夫婦喧嘩のおかげです」。さらに、戦時中 大変な窮乏生活を余儀なくされ、目を回すような貧乏を強いられますが、ここでもまた「お金がなくても生活できる確信を与えられました」と、そう振り返っておられます。

戦後は、小説が一向に日の目を見ず、50 を越えて再び 壁に突き当たります。すると、今度はどうしたかといえば、夜間の神学校に入学。物を書く勉強をしたから、それを生かして、聖書の御言葉を分かりやすく書こうという思いからでした。53 歳のときでした。夜学のため 居眠りもよくし、記憶力の減退から、ギリシア語では 100 点満点で 3 点しかとれなかったこともあったといいます。しかし、ここでもまた、「説教中 居眠りをしている人がいても 腹が立たないし、劣等生の気持ちも分かるようになった」と言われる。そして牧師生活に入られるのですが、ここで早速、女流文学賞で貰ったお金で教会堂の建築に着手。と同時に、名前を知られるようになったことから、各地の教会に招かれ、説教や講演をされるようにもなります。こうして、御本人曰く、「どうやら、

六十の手習いでこれくらい話せるようになりました。しかも、大きな声を出しますので、自然に血圧が普通になりまして、ただ今は どんなハードスケジュールでもこなします。まことに、神の国と神の義を求めれば・・・ですね」と、なんとも信仰のウイットに富んだ方でした。

信仰には、こうしたユニークで個性的な、また 遠回りでゆっくりとした歩みもあるのではないでしょうか。むしろ、普通のコースから外れた 決まりきった道筋でない歩み、一直線でない歩みだからこそ、そこに 神様の支えと励ましとを見る思いがします。そうしたユニークさと紆余曲折にもかかわらず、それでもなお、そこを突き抜けて生きられる姿。私はそこに、内に生きて働かれる 恵みの神の御手を見る思いがしています。阿部先生は御自身の半生を振り返って、次のようにおっしゃってもおられます。「幼稚園の先生が『白い花、赤い花、小さい花、色々あるけれど、それぞれ 神様から頂いた花を精いっぱい咲かしているでしょ。お隣りの花を羨ましがって指をくわえていると、良いお花になれませんよ』とおっしゃったのが身に沁みまして、せっかく頂いたいのちを精いっぱい咲かせようと心がけ、自由を得たのでした」「牧師先生が聖書をゆっくりゆっくり頷きながらお読みになるのを伺っていると、『汝ら苦しめる者あるか。さらば祈りせよ』（ヤコブ 5：13。文語訳）と 当時の文語訳でお読みになりましたのが心に残りました。この一句が長い私の一生を支えました」「人間は行き詰まるたびに一段階 上げていただくものです」「こんな生活の中で首も括らず、今まで生きてこられたのは聖書のお言葉のおかげです」「パウロが『わたしの恵みはあなたに対して十分である。わたしの力は弱いところに完全にあらわれる』（Ⅱコリント 12：9。口語訳）という神の声を聞いていますが、完璧でなければならないと思うことの間違いを悟りました」「どうか、皆さん方も各自、造り主なる神に愛せられ、それぞれ頂いた又とない人生を御心に従って育て、神の御国に入る歩みをしてくださいますよう お祈りします」。言ってみれば、どれも日常の中の日常的な事柄ばかりです。しかし、私はそこに、イエス・キリストを頂き続けた阿部先生の信頼と献身の姿を見るように思わされています。そしてまた、それに応えて同じように、御自身の信頼と献身とを返し続けてくださった生ける神様の御姿を。

とはいうものの、このような人たちがいる一方で、しかしまた「私の肉を食べ、私の血を飲むように」と言われても、そのようにしない人々がいるのも事実です。つまり、主イエスを受け入れることをしない人々です。主イエスの後を追って、五千人の給食の丘からカファルナウムへとやってきた群衆たちも同様でした。ヨハネは 41 節で、「ユダヤ人たちは、イエスが『わたしは天から降ってきたパンである』と言われたので、イエスのことでつぶやき始め・・・」と記しています。呟くとは、よく知るとおり、自分の中だけで、あるいは自分たちの内輪だけでブツブツ、ゴチャゴチャ言うことです。相手ときちんと向き合って、誠心誠意、真っすぐ言葉を交わすことが真の語り合いだとすれば、呟くのはそれと反対のことです。陰でブツブツ言う。見えないとこ

ろであれこれ言う。また、本人に気づかれないよう、仲間内だけで陰口をたたく。そこにあるのは、こちらの思うように振る舞ってくれないとの不満であり、疑いの猜疑心をもって相手を見る態度ではないでしょうか。信頼とは逆の、斜に構えた不信のそれです。彼らは ですから、主イエスのことでこう言って呟いたといいます。42 節、「これはヨセフの息子のイエスではないか。我々はその父も母も知っている」。ついさっきまで、王に祭り上げようとして (6：15)、主イエスの後を追いかけてきた人たちです。それが、自分たちの間尺に合わないと気づくや、一転、もう背を向けています。背を向けるばかりか、「たかが大工の息子じゃねえか。それも、田舎もんの夫婦の息子だ」と、そう言って呟き、足を引っ張り始めます。物事を、自分たちの都合に合わせてしか見ようとしない。自らの思わくにしがみつき、真実 目を向けるべきそのところに目が向けられない。それでは やはり、真理を真理として見ることは難しいのではないでしょうか。本来 受け入れるべきものを受け入れることができなくなるように思われます。ですから、イエス・キリストははっきりと言われます。「つぶやき合うのはやめなさい」(43)

考えてみれば、この問題は決して、今日のこの私たちとも無縁でないように感じられます。見るべき真実を見、知るべき真理を知るには、私たちもまた、呟くことから自由にならなければならない。いのちに繋がる大切な事柄に連なるには、私たちもまた、真っすぐであらなければならない。真のそれに日ごとにあずかるには、私たちもまた、その心を開け広げなければならない。そのように思わされるからです。

けれども、まさしくそのところが問題なのであって、ヨハネの教会は実際、そこで葛藤し、苦闘し、そして その答えをたずね続けたのではないか。そう思われてなりません。どういうことかというと、それは、6 章を読み進めるなか、繰り返し言及してきた問題です。ヨハネの福音書が他の 3 福音書と明らかに違っている点。五千人の給食にあずかった群衆が対岸のカファルナウムにまで 主イエスを追いかける。がしかし、事が信仰の核心に至ると、その同じ人たちが一転、今度は主イエスを拒むという、その対比です。ヨハネが、湖上の奇跡を挟んで、その前後をひと続きの出来事として語っているのはまず間違いないと言えるでしょう。他の福音書とは異なる点で、ヨハネは意図して、意識的にそうしている。つまり、同じ人々のその連続と非連続を、すなわち 連続と断絶とを対比させ、そこから私たちに語りかけている。ヨハネの教会自身が問い続けた その問題について、です。

それは、しばしば議論されることもある 次のような表現に表わされていると思われます。「父がわたしにお与えになる人は皆・・・」(37)「わたしに与えてくださった人を一人も・・・」(39)「父が引き寄せてくださらなければ、だれも・・・」(44) といった表現です。というのも、単純に字面だけを追うと、どんな印象でしょうか。神が決められた人だけが主イエスを信じる。その人たちは神によってあらかじめ定められていて、すでに決まっている。そんな印象を受けられないでしょうか。広い意味で予定説と呼ばれたりする考え方ですが、様々な理解があり、学者らの間でも 明確な一致は見られていません。主イエスを遣わされた神様にどう応えるか。その愛に対する人格的な応答の在り方が問われている、という点では基本的に了解されていますが、議論

は続いています。ただ、ヨハネの言葉から私が感じ取れるのは、その宣教における 彼らの葛藤や苦闘にほかなりません。

伝道といい宣教といい、それらはそもそも、この私たちもよく知るように、願うとおりに容易に進むものではなく、障害や困難があれこれ付きまとうものです。そのことは、どの福音書も経験をし、知っていたにちがいありません。イエス・キリストを宣(の)べ伝(つた)え、そのもとへと 人々を招く。が、それに応じる人もいれば、そうでない人もいる。応じたかと思いきや、心変わりをさせ、去っていってしまう者もいる。それは、ヨハネに限ったことではなかったはずです。しかしながら、ヨハネの教会は他に増して、とりわけそうだったのではないでしょうか。なぜかといえば、マルコ、マタイ、ルカの 3 福音書が紀元 70 年代から 80 年代にまとめられたのに対し、ヨハネのそれはその後(あと) 最も遅く、90 年代にまとめられているからです。ということは、ローマとの戦いでエルサレムの神殿が炎上し市が陥落した 70 年以降、国外からはもとより 国内的にも厳しくなったその迫害の手が、ヨハネ福音書の編纂時(へんさんじ)にはいよいよ激しさを増していた、ということです（2017 年 4 月掲載の「はじめに」所収「『ヨハネによる福音書』を読む前に」を御参照)。そうした情況のなか、ヨハネの教会は、それまでになく困難な現実を目(ま)の当(あ)たりにしていたのではないでしょうか。思うように進まない伝道。しかも、招きに応えて教会に来ても、そこでなおも揺れる人たち。さらには、群れに加わったにもかかわらず、教会を去って、また元の所に戻ってしまう者たち。そうした現実に直面して、ヨハネがまとめて言葉にしたのが今回の全体ではなかったか。五千人の給食から主イエスの肉と血に至り、そして多くの者たちが主のもとを去るという その全体ではなかったか、と そう思わされています。

ですから、それはヨハネの教会の問いであり、また答えでもあるのだろうと思われます。五千人の皆が、パンと魚(さかな)の恵みにあずかった。そして、それらをくれた主イエスの後(あと)を追った。なのに、事が主イエスへの信仰の核心に至ると、その同じ人々が戸惑い、呟(つぶや)き、そして馬鹿馬鹿しいと言って、主のもとを離れ去る。以前にも、またこれ以降にもあったにちがいない そうした現実に対して、ヨハネの教会はきっと、葛藤の問いを発したのではないでしょうか。それはいったい なんでなのか、と。そして、その葛藤の末に至った答え。それが、前述の 37、39、44 節に見るような、そのような表現の言葉ではなかったかと考えています。それらは、イエス・キリストを信じ受け入れる人は神によってあらかじめ定められている、というような いわゆる単純な予定説的なものではないでしょう。ヨハネ福音書には、例えば、主イエスとサマリアの女性とのやり取りが収められています（4：1～42)。ユダヤ人から蔑(さげす)まれ、関わりを持たないのがしきたりとされていた、そのサマリアの地です。しかも、相手は女性で、さらには どう見ても普通の女性ではありません。そこに、主イエスは顰蹙(ひんしゅく)と非難を承知のうえで、あえて 意図して踏み込まれた。その出来事を、ヨハネはなんと、新共同訳聖書で 2 ページ以上にもわたって 長々と書(か)き留(と)め、自身の福音書に収めています。そして、これは他の 3 福音書にはない、ヨハネだけの記述でもあるのです。(2020 年 12 月から 2021 年 10 月にわたって掲載の「4 章 1～26 節」「同 16～26 節」「同 16～30 節」「同 31～38 節」「同 39～42 節」を御参照）他にも、異邦人であるギリシア人が道を求め、主イエスに取り次いでいただきたいと申し出る（12：20～26)。また、罪の結果とも考えられ、社会の隅に置かれていた病人（5：1～18。

2022 年 2 月掲載の「5 章 1〜9 節 a」および同年 4 月掲載の「5 章 9b〜18 節」を御参照）や盲人（9：1〜41）を、主イエスが癒やされる様など、そうした ヨハネ的とも言える記述も少なくありません。前述の章節がもしも 予定論的な意味合いで記されたものであったら、既存のしきたりや定めに縛られない、むしろそれらを超えるような こうしたあれこれは記さなかったのではないでしょうか。その意味では、ヨハネによる福音書は 私たちが思う以上に、バリアを超えて 事に踏み込んでいると言えるようにも思われます。

そうではなく、つまりは こういうことではないか、と思うのです。すなわち、人がイエス・キリストのもとへと寄り来たり、主イエスを受け入れ、これを食すのは、自分たちの汗と力だけでは成らない。それは、自分たちの頑張りや力こぶ、工夫や計画、読みや計算だけで叶うことではない。神が「引き寄せてくださらなければ」事は成らないのだから。そこに、神の働きがなければ・・・。それは いわば、神の霊たる聖霊の働きを暗示しているのかもしれません。その働きは、しばしば指摘されるように、ヨハネに色濃く感じられるものだからです。

こうして、ヨハネの教会の葛藤と苦闘の言葉は、ここに至り、その深くも熱い祈りの言葉となります。「神よ、働きたまえ。御業をなして、愛する人々を引き寄せたまえ。その心に出会いを起こしたまえ。そのために、我らを用いたまえ」と、そのように祈る祈りの言葉に。

それは、時代を超えた、極めて今日的な祈りと言えはしないでしょうか。なぜなら、伝道や宣教には いつの時も、同様な困難が付きまとうからです。そして、私たちはそのただ中で、ヨハネの教会と同じ祈りを祈らされるからです。「神よ、働きたまえ。御業をなして、愛する人々を引き寄せたまえ。その心に出会いを起こしたまえ。そのために、我らを用いたまえ」と。

しかしながら、同時に、それは何よりもまず、主イエス御自身の祈りだったことを忘れることはできません。それは、主イエス御自身がその宣教の苦闘の中から発せられた言葉であり、祈りに満ちた言葉であったにちがいありません。そして、その苦闘とその祈りとを、主イエスは止められることがありませんでした。御自分を拒んだ人々にしても、主イエス御自身は彼らにパンと魚を分かち、生けるいのちへと 彼らを招かれたのでした。けれども、彼らはそれに応えることをしなかった。別の箇所（ルカ 17：11〜19）でですが、宗教改革者のルターは かつて、次のように語りました。「キリストの愛は、失われた愛である。それは、十分の一しか報われない。しかし、キリストはそれでもなお、その御業を決してお止めになろうとはされない」。私たちはこの愛の主のもとへと招かれ、そして その御業に連なり、そこで その恵みにあずかるようにと招かれているのではないでしょうか、うれしくも また光栄にも。

終わりに、一つ残された問題について触れたいと思います。それは主の晩餐式（聖餐式）に関連するもので、これまで繰り返し述べてきた 6 章の文脈的構造からするとき、そこでどのようなことが考えられるか。すなわち、湖上の奇跡を挟んで、前後が連続し かつ断絶している 6 章の、その対比的文脈。それははたして、式の在り方に関して どんな推論をさせるだろうか、ということです。

主の晩餐式をめぐっては、近年しばしば、フルオープン（完全開放）という表現を耳にされることがあるかと思います。信仰の有る無しにかかわらず、また年齢の如何にかかわらず、その場にいるすべての出席者にパンと葡萄酒を分かつという、そのような式のもち方です。ですから、そこでは極端な場合、母親が抱いたり座らせたりしている乳幼児にも同じように それらを与える姿が見られもします。つまり、その根拠として、多くの場合、五千人の給食の記事が用いられる。主イエスは、そこにいたすべての人たちに パンと魚を分かたれたのだから。だから、主の晩餐式でも同様に、すべての出席者に・・・というようにです。しかし、五千人の給食から展開する 連続と断絶の対比的文脈を踏まえるとき、はたして 単純にそう言えるものかどうか。前後の文脈は、それとは少しく違った視点を示しているのではないか。むしろ、それとは異なる意味合いを語っているのではないか、と そう考えさせられます。約言すれば、つまりは こういうことです。すべての人たちに それが分かたれる五千人の給食。それはすなわち、すべての人々に 神の恵みが注がれていることを。そして、そうしてもらったその同じ人たちが 今度は、主イエスの肉と血を頂く者とそうしない者とに分かれてゆく。それはすなわち、主イエスへの信仰を明らかにする者とそうしない者とを意味しているのではないか、ということです。神の「恵み」と信仰の「告白」という、対比的な連続と断絶の文脈です。

このように見てくるとき、主の晩餐式との関係で言えば、五千人の給食のほうではなく、肉と血に直接言及している後半のほうがそれに関わると見るのが常識的であり、妥当とも言えるのではないでしょうか。言い換えれば、主の晩餐式は主イエスへの信仰を告白する式であり、そうする者がそれにあずかる時ということです。主の晩餐式（聖餐式）が式として確立したのは紀元 150 年前後と言われ、ヨハネの福音書がまとめられた 90 年代はたしかに、いまだ その途上にあったと言えます。ですが、その過程がそれなりに進んでいたことは間違いなく、式がそもそも意味したところをそこから読み取ることは的の外れたことではないと考えられます。そのような意味で、少なくともヨハネ福音書の視点からするとき、五千人の給食をもって 晩餐式フルオープンの根拠とするのは無理があるように思われます。

イエス・キリストが、私の肉を食べ、私の血を飲みなさい、と言われる 主の晩餐式。私は、病床で行なった式のことを忘れることができません。心臓を悪くして入院され、礼拝に出席することができなかった熟年の教会員でした。その方は、私が分かったパンと葡萄酒を、本当にうれしそうに、そして 本当にもったいなさそうに口に運ばれました。その表情はとても穏やかでした。体が思うようにならないからこそ、私たちが見る以上に、見えないものが見えていた。主イエスの御姿を、私たちよりずっと近くに見ておられたにちがいありません。そこでは、永遠のいのちがすでに この世のいのちに入り込んでいました。そのふたつが一つになっていた。そして、この世のいのちが真のいのちとされていた。主イエスが「はっきり言っておく。信じる者は永遠の命を得ている」（47）と言われたように、もうすでに、そこで それを得ていました。

〔祈り〕

愛する神様。

御子(みこ)イエス・キリストの肉と血を感謝いたします。そして、それは実のところ、あなた御自身が裂かれた御体(みからだ)でもあったことを憶えます。私たちを生けるいのちに招き、生きることを真実 喜ばしいものにしてくださるため、そのようにして、私たちを御許(みもと)に引き寄せてくださった十字架の愛の御業(みわざ)を心より感謝いたします。

このとき、聖霊において 私たちに近く親しく臨み、いま一度 私たちをあなたの内へと引き上げ、引き寄せてくださいますように。そして、あなたにある永遠のいのちを日ごとの歩みに注ぎ入れ、私たちの内にあなたの御心(みこころ)を息づかせてください。御業(みわざ)の一端を担う者として、御心のあるところに私たちを遣わし、そして お用いくださいますように。

主の御名(みな)によって願い、お祈りいたします。

アーメン